

万波医師が奪い去った 老婆の腎臓

「万波氏のしたことは許せない」

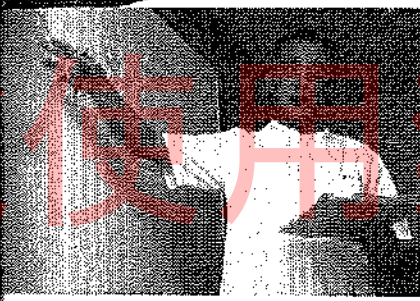
宇和島徳洲会病院の万波誠医師が中心となって病気の腎臓を摘出し移植していた問題は、当の万波氏の説明が二転三転、病院側の発表にも次々とウソが発覚して泥沼化している。

当初、万波氏らは「病気の腎臓は04年以降で合計11件」と説明していたが、

手術室の一部始終

もっと以前から広範囲に行なっていたことがわかり、問題が拡大している。なぜ大規模に異例の手術が行なわれていたのに、これまで発覚しなかったのか。

「万波さんとそのグループの医師たちは、日本移植学会に加盟していません。今回発覚した移植は、学会の基準からいえば完全な違反です。第三者によるドナーの意思確認とか、院内の倫理委員会、移植学会への連絡などが全くなされてい



手術の正当性を訴える鹿兒島徳洲会病院の北島敬一 院長

手術は密室で行なわれる。患者は目の前の医師がベストを尽くすことを信じて、肉体を委ねるのみだ。病気の腎臓で「多くの人を助けた」という万波医師に「摘出する必要のない腎臓を摘出し、移植に回していた可能性がある」と、驚くべき告発がなされた。患者は助けられたのか、裏切られたのか。

利正・医学博士
臓器移植法でも医学界でも、同学会に所属しない医師や病院が臓器移植を行なうことは想定しておらず、万波氏らは確信的に学会のルールを無視して独自の移植システムを広げていたことがうかがわれる。だから、問題が大きくなってから慌てて一般的な移植ルールに「適合していた」と取り繕ってもボロが出るのは当然だったのである。

しかし、いくら学会に所属していても臓器移植法に違反していれば処罰される。現在、捜査当局や厚生労働省など行政機関が経緯を調査しているが、同法に照らして特に問題になりそうなのが、売買された腎臓を移植したケースと（金銭授受の禁止に抵触）、本当

徳洲会サイドはこの症例について、「腎臓を摘出す

「摘出は必要なかった」「いい腎臓だね。使えるね」と喜んだ」ほか

ることについては同意書を取っている。移植に使うことは口頭で説明した。何の問題もない」（北島氏）

和島市立病院にカルテが残っていないなど、真相ははっきりしない。

そんな中、医師団のメン

血管の修復だけですむ症例

手術が行なわれた当時、A氏は週に1回、鹿兒島徳洲会病院で外来の診察に当たっており、万波氏の名は知らなかったという。

「たまたま病院で手術の予定表を見ていたら腎動脈瘤の症例が入っていた。私はそれまで経験がなかつたので北島氏に

「手術のメンバーに入ってもいいですか」と聞いたところ、

「いいよということだった。同意書も見ました。

腎臓摘出について書かれたもので、移植に使うことは一切書いていませんでした。万波氏が執刀することは当日まで知らず、「泌尿器科の有名な先生だ」と紹介されましたが、なぜ、よその医師が執刀するのだろうか」と不思議に思いました。

腎臓を摘出するとしても、北島氏ひとりですら十分可能な手術でしたから」

腎動脈とは、心臓から下肢まで続く大動脈から枝分かれして左右の腎臓まで血液を運ぶ直径1センチ・長さ3

センチほどの血管で、その壁の一部が弱くなって血圧により膨れ、瘤状に血だまりができた状態が動脈瘤だ。それが破裂すれば大出血を起し、命にも関わる。専門医によれば、瘤が大きくて腎動脈全体を摘出しなければならぬような場合、腎臓摘出もやむなくなる。しかし、老女のケースはそうではなかったという。

「北島氏は動脈瘤の直径が2センチ以上あったといっているが、私の印象では血管径の倍もあったようには見えなかった。少なくとも腎臓を摘出する必要はなかったと思います。動脈瘤のある部分の血管を切除してつながり合わせるか、血管をかなり切らなければならぬ場合でもペイングラフト（大腿の静脈）を使うなどして血管の修復だけで済む症例でした。もし泌尿器科医にできないなら、血管外科の医師にやらせれば簡単にできます。当時、私はまだ若く経験も浅かったけれど、それでも、つなげといわれ

万波医師

メンバーが決意の告発!



万波医師は「神の手」といわれるほどの実力の持ち主だった（右は手術が行なわれた鹿兒島徳洲会病院）

病気の腎臓移植

スクープ証言

「たオレでもつなげるな」と思いました。それこそつなぐだけなら15分もあればできる手術です。

私が問題だと思うのは、万波氏や北島氏はそれを十分にできる技量を持っていました。特に目の前で見た万波氏の技術はすごかった。ほとんど出血がない。すべてが早く正確で、血管の縫合も専門医の私から見ても完璧でした。

北島氏は、あの女性と家族に摘出の同意を取る時に、「摘出だけなら2時間、腎臓を再び戻すなら手術は6〜7時間かかる」と説明したそうですが、あり得ない話です。万波氏の実力なら、仮にいったん腎臓を摘出し、その後自己腎臓を戻すこと、するとしても1〜2時間もあれば可能だったのではないのでしょうか。それを6〜7時間かかるといわれれば、年若い患者は「じゃあ、取ってください」というでしょう。本当にできない医師がいくらならともかく、あれほどの

「それでも万波先生は神業 救われぬ移植希望患者の苦悩」

今回の事件を取材するため鹿兒島を訪れた本誌記者が耳にした万波医師の評判は、必ずしも悪くなかった。

「鹿兒島の透析患者で万波さんのことを知らない人はいません。ものすごく優秀な移植医だとみんな知っています。」

透析に苦しむ患者にとって移植は「最後の希望」

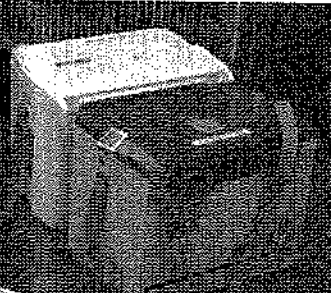
問題が発覚してから、万波先生と交流のある医師がこんなことをいっていました。「万波さんは馬鹿正直だから、変な事をいって問題になるだろうけど、汚いことは絶対にしない人だから安心しない」と。僕もそう思っています。もし僕が腎臓病になったら、寿命が縮んだとしても万波先生から病腎の移植手術を受けたいです。」(鹿兒島の医師) 万波先生は万波医師を頼るのか。そこには今の移植医療が抱えている問題や

「透析中の血圧の変動等による苦痛や透析後の疲労感、長期透析による合併症の治療などが生きている限り続くのです。」(前出・金子氏) 働いている人のなかには、透析患者であることを理由に会社から解雇される例もあるという。透析に時間がかかるため、勤務に支障をきたすことも少なくありません。そのため、透析患者の1割が解雇や退職などの問題に直面しているのです。」(ある腎臓病患者) 透析患者は、その病のため生活さえも脅かされている。だからこそ、腎臓を思う患者は移植を望んでいるのだ。しかし日本臓器移植ネットワークによれば、腎臓の移植を希望している登録者数は1万1732人。しかし、05年移植手術を受けた人は994人と圧倒的に少ない。明らかにルールを逸脱した移植に手を染める万波医師が「神」と崇められている奇妙な現実が、事件の背景にあったことは見逃してはならない。

技術を持っているのに、実際以上に大変な手術だと思者に説明していたとしたら、「移植ありき」だったといわれても仕方ない」(A氏)

「腎臓の手術が一番美しい」

A氏が目にした手術室の光景は、「移植ありき」を強く疑わせるものだった。「万波氏はこれまで、腎臓を取り出してから準備できるとわかってから準備を始める。移植は出会い頭で説明しては絶対だに違ふ。少なくとも鹿兒島の手術では、最初から移植するつもりで万全の準備をしていました。移植するならば、摘出してすぐに臓器の中の血液が凝固しないようにウォッシュアウト(洗い流すこと)して



「移植は計画的ではない」といいつつもクーラーボックスまで用意していた(写真はイメージです)

「あとよろしく」と腎臓を持って隣の部屋に行ってしまった。私たちが縫合している間にプレパレーションを終え、クーラーボックスを持って「じゃ、飛行機の時間があるから帰ります。さよなら」と、帰ってしまつたのです。手術中、こんなこともいってしまいました。「僕は腎臓の手術が世の中で一番美しいと思うんだよね」と。自分のアイデンティティは腎臓手術だという人だから、ああいうことをしたのでしよう。しかし、本人に戻せるはずの腎臓を移植に回すというのには、目の前の患者にペストを尽くしていないことになる。私はそれが許せないのです」(A氏)

手術が始まってからの万波氏は、北島氏がマスコミに語ったような「ものすごく難しい手術」をしている雰囲気ではなかった。「血は出ないし早いし、最初から最後まで世間話をしていたくらいです。それほど順調で、いい手術」だった。腎臓を見て万波氏は、「いい腎臓だね。これなら使えるね」 などと聞いていました。そして腎臓摘出が終わると、